



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2021年12月10日発行 第44号

師走を迎え、一年が終わりを告げようとしています。コロナ禍の一年でしたが、少しずつ平常な一日が戻りつつあるように感じられます。しかし、新たな「オミクロン株」なるものの出現が、今後どのような影響を及ぼすのか気になるところです。

新しく迎える年が、平穏な日常に戻ってくれることを祈るばかりです。

◎ マエストロの特別主位研究講座 2021 が開催される！

恒例となっている“丸山桂介”氏を迎え、先ごろ研究講座が開催されました。今年は、「理論」に絞り、全7コマの連続講義が設定され、3つのテーマにより次のように開講されました。



- ④ バッハ作品の講解「カンタータ」及び「組曲」の奏法と歌い方〈2コマ〉
- ⑤ フィデリオとメロドラマ〈2コマ〉
- ◎ アパッショナータと英雄 —分析と精神的背景—〈3コマ〉

今回は、1コマ2時間10分の講義を3日間にわたり開講していただき、毎回思うことですが、音楽に対し真摯に向き合われる丸山氏の精力的な姿に、頭が下がる思いで聴講させていただきました。私は、都合で上記の◎講座3コマのみの聴講となりましたが、ベートーヴェンの曲づくりについて、「何を思って、何を哲学に、何を参考にして創作されたか…」を理解すること。また、演奏家としての心得として「楽譜を深く読み解くこと」「作曲家の意図を基にして個を生み出すこと」などが大切で、決してエンターテインメントのみを目指すことではない事が、講義を通して身に染みて考えさせられました。考えてみれば、論文のテーマでも新しい発見が無ければ意味がなく、作曲家や演奏家も他者の真似では個の音楽と認められないように、あらゆる方向からの研究姿勢が問われることに繋がっているのだと改めて気付かされました。

この度は、全コマを受講できなかったことと、受講された方々の率直な感想が聴いてみたいという思いでアンケートを実施いたしました。この便りではスペースに限りがあるため、要約させていただいたものを一部紹介いたします。

《講座④》

- ◆ とかく音楽の歴史だけを学んで曲を理解しようとするが、その背景にある政治・文学・演劇 etc. の歴史と一緒に学び理解しないと音楽の深さがわからないと感じた。
- ◆ 演奏するうえで、時代背景、歴史… 様々なことを踏まえ、しっかり楽譜を読み込んでいかなくてはならない事がよくわかりました。
- ◆ 音階・響きが言葉に結びついていることを知り、聖書や詩、そして楽譜に記された音についてよく理解しなければいけない深い音楽であることが、無表情な演奏と言葉を考えた演奏との対比からよく感じられた。

裏面へ

《講座⑥》

◆音楽と一見無関係と思っていたことも、繋がる事もあるので、若いうちから映画・読書等、見たり読んだりしておくとういと感じた。

◆言葉のない器楽作品にも言葉が影響していることは考えたことがなかった…。演奏を聴いてなぜその表現なのかを考えるとときには、好き嫌いを超えて演奏家の感じる言葉の理解に努めたい。

《講座⑦》

◆現地参加をさせていただき、改めて感じたのは、先生の声の響き、音源をあの空気感の中で聴き入ることの醍醐味です。演奏とは作曲家への尊敬と、生きた軌跡を残してくれた楽譜から、内面の声を聴き取ろうとする過程そのものなんだと思いました。

◆楽譜をいかに読むかの方法として（当時の）ヨーロッパ的な響きを考え、楽譜には表現されないベートーヴェンの心（頭）の中で響いた音を再現しようとする行為は、楽譜に対して頭を下げるべきであり、演奏家にとっては原則的な演奏方法であろうと思えた。

◆大好きな「英雄」交響曲が、一層好きになりました。これからは、ベートーヴェン末期のピアノソナタ、及び弦楽四重奏曲をじっくり聴いてみたいと思います。

《講座全体を通して》

◆音楽をもって、戦況を変えることが出来なかったベートーヴェン。丸山先生の「ベートーヴェンの作品は、何かを伝えるための作品」という言葉が強く印象に残り、この先のベートーヴェンの作品との向き合い方が、かなり変わってくる気がしました。

◆音楽と深いかかわりのある言語をはじめ、文学・哲学・宗教など、様々な分野を深い視点から掘り下げて、総合的に学問を学ぶことで、音楽をあらゆる角度から考える視野を与えていただいたように思います。

◆講座を通じて「言葉と音楽」が一貫したテーマと受け取りました。バッハの演奏がテキストを意識したとたんに大きく違う演奏になったことをひしひし感じさせられました。そして、「ベートーヴェンの音楽は、音楽のための音楽ではない、それを超越したものを伝えようとしたはずである」というお言葉が強く心に残っています。

特別主位研究講座を受講された皆さんのアンケートを拝読しましたが、多くのことを学ばれ、気付かれ、考えさせられとても有意義な時間を過ごされたことがよく伝わりました。丸山氏の研究に対する熱意は相当なものであり、一つの事柄にも膨大な資料から読み解かれ、その研究成果を私たちに惜しげもなく伝授される姿勢に唯々頭の下がる思いでいっぱいでした。

以前に丸山氏はこんなことをおっしゃいました。「私の研究したことを少しでも多くの方にひろめたい…。私に残された時間もあとわずか…。」のお言葉が印象的でした。生涯を賭けて音楽に対する

「理論と実践」を追及される姿に、次回はどんなお話が聴けるのかと楽しみになるのは私だけではないと思われます。また、「出雲芸術アカデミーという存在と取り組みは素晴らしい事であり、継続していくことこそが大きな意味を持つことである」というメッセージは、私たちに大きな勇気を与えていただきました。



【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】